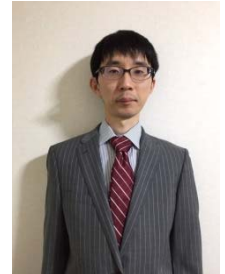


イギリスのヴィクトリア朝小説における 〈子ども〉の表象

瀧川 宏樹 (たきかわ ひろき)
工学部 総合人間学系教室 特任講師



用途・応用分野：

■ 研究概要

イギリス文学において〈子ども〉が作品の中心テーマとして描かれ始めたのは19世紀以降であった。それまで〈子ども〉は、文学を通して伝えるほど重要な存在と思われてはいなかった。チャールズ・ディケンズやブロンテ姉妹などの、ヴィクトリア朝の小説家たちは〈子ども〉を作品内の重要人物として描き、読者に〈子ども〉の重要性を伝えていった。彼らが描いた子ども観や子どもの表象を探ることは、現代に生きる我々にとっての〈子ども〉という存在や社会における〈子ども〉について考えることにもなる。



← チャールズ・ディケンズ作
『デイヴィッド・コパフィールド』
の挿絵より

ブロンテ姉妹の肖像画 →



■ 研究の特徴

「子どもは無垢な存在である」というのは、現代では自明のことである。この概念を広めるのに大きく貢献したヴィクトリア朝作家の作品を今一度精読する。

- ①ヴィクトリア朝作家たちは、いかにして子どもの無垢を描写したのか
- ②そもそも子どもの無垢とは描写可能なのだろうか
- ③現代におけるわれわれにとって〈子ども〉という概念がどのような意義を持つのか

